# 言語学の興味と方法*

武 内 道 子

## 1. はじめに

人が何に興味を持つかは、そしてどこが面白くて血眼を上げているのかは、部外者にはうかがい知れないものである。私は言語学が最高に面白いと思っているが、どこが、と問われたら、経験科学と物理学と同様の自然科学の両方の性質を併せ持っているからと答える。言語学の中でも、なぜ語用論かとたずねられれば、言葉の使用に関わるから、つまり人間くささが入ってくるからと答える。

われわれ言語科学者は、言語の研究とは人間が言語を獲得し使えるようになる認知能力についての科学的研究であるという視点に立っている。言語学を自然科学として捉えるということは、様々な言語を調査し、分析し、そこから得られた結果を、帰納的、経験的確信として記述するのではなく、心理学的、生物学的必然として帰結すると主張することである。科学であることの本質は、その対象に対して「説明」を求めるということである。それがなぜ今あるようにあるのかを求め、説明しようとすることである。本小論で言語学の説明理論の構築といういとなみを、語用論の側面から述べてみたい。

私のやっている語用論は、ずっと言語学のゴミ箱（wastebasket）と言われてきた。言語使用はごく日常的なことであるがゆえに、分析、考察の対象とはならず、時には手に負えないものということで、横のテーブルに

積まれてきた。ゴミ箱の中身は一つのカテゴリーのもとに整備されず、study of everything （Chomsky）として、言語現象の分析の形式的システムの中で扱われえなかったのである。その結果、語用論とはネガティブに定義された、wastebasketと。

言語の使用はごく日常的なことであることはいうまでもない。すなわち、何をするにも言語は生活の中心となっているし、どんな学問分野を研究するにしても、言語を使用しなければならない。結婚申し込みも、環境保護の訴えも、安倍首相への攻撃も、発表原稿を書くのも。自分の興味について聞いてもらうときも、レストランで注文するときも、車を売るときも伝達が不可欠であるが、伝達は言語なくして不可能である。伝達というのは、ひたすら推測に依存している。たとえば、「何もない」ということによって、冷蔵庫を開けた子供が冷蔵庫が空っぽであると言っていると解釈されないし、場合によっては「見たいテレビの番組がない」と解釈される。あるいは、「外は大雪だよ」と発することがお使いに行けないことを伝えることもあるし、「お前は天才だね」と言われたからといって、自分が天才であると相手が思っているとは信じないこともある。「ハンカチ入れてきたつもりなのに」と言って、ハンカチを貸してほしいと依頼していることもあろう。

推測を可能にしているのは、人間には対話の相手が何を考えているかを察知する能力があるという事実である。ここまでは自明のことである。しかしこうした事実、つまりわれわれが言語表現を使って発したものは、伝えようと意図した思考のごく一部であるという事実を、正しく説明する理論を構築することは自明ではないし、決して単純な仕事ではない。関連性理論（Sperber and Wilson）の貢献は人間の発話解釈を説明する理論を打ち立てたことである。

## 2. 二つの認知モジュール

Chomskyがたびたび指摘するように、言語学には以下のような四つの課題がある。

(i) 言語の知識とはどのようなものであるのか。
(ii) 言語の知識はどのようにして獲得されるのか。
(iii) 言語の知識はどのようにして使用されるのか。
(iv) 言語の知識は脳内に、どのように具現されているのか。

生成文法理論は、(ii) を念頭に置きながら、(i) をもっぱらの研究対象としてきた。(iv) は脳生理学に属する。語用論は (iii) の問題を研究対象としている。

Chomskyは、言語を本質的に心理現象として捉え、音連続と意味のある概念を一定の仕方で結びつけ、「言語」たらしめているのは人間の頭であるとした。この話し手の頭の中に存在している「言語知識 (language knowledge)」を言語学の研究対象と明確に定め、言語学を人間の心の研究の中心に位置付けた。「言語知識」を母国語話者の脳が、ある一定の発達段階に達した状態 (安定状態) として捉えらえることを主張した。このことはより根源的な問題 (ii) へといざなうことになる。ヒトが生まれたばかりの初期状態にある、将来「言語知識」に発達するはずの部位はどのようになっているのか、そして、初期状態から安定状態へどのように到るのかという問いである。この問いに、種としての生物学的特性として、脳の一部に「言語機能 (language faculty)」と呼ばれる心的器官 (UG) を持って生まれ、これが異なった安定状態に達した結果が母国語話者の脳内にもつ言語知識であるという仮説を提出した。こう考えることによって、日本語の言語知識と英語の言語知識は明らかに異なっているが、人間はいかなる言語をも学べる、しかも生れ落ちて4-5年のうちに母国語を獲得するという事実が説明される。

一方、言語による伝達の成功を支えているのは、言語知識と話し手の意図を推測できる能力の両方である。二つの能力は人間の認知システムの中に存在する能力であると考えてよいだろう。人間の認知システムの中で独立した機能として発達し、言語による伝達という特殊な状況で、両者は相互作用しながら発達すると考えられる。前者は言語モジュールを構成し、

後者は心理学、哲学の分野で「心の理論機構（theory of mind）と呼ばれ、これも一つのモジュールとして捉えることが出来ると考えられている。心の理論機構は、感情、欲求、知覚、意図、信念、思考、推論などをつかさどるシステムで、自分が感情、欲求、意図、信念を持っていることを自覚させ、他者が自分と異なる「心」を持っていることを推測させる。心の理論機構が正常に機能している場合（自閉症患者は心の理論機構が正常に機能していないと考えられている）、人間は認知的情報を表示形成する。ここに言葉による伝達の普遍性のキーがある。つまり、言葉による伝達の成立は心の理論機構モジュールの下位にある。

発話解釈が認知的基盤に根ざしているという主張は、関連性理論以前の語用論においては受け入れられていなかった。関連性理論は発話解釈をパーソナルレベルで捉えるのではなく、Chomskyの生成文法のように、サブパーソナルレベル、すなわち生物学的レベルで説明しようとする。両理論とも、事象を常識といった暗黙の了解に任せないで、母国語話者の直感に訴えることを排除するということである。発話解釈をこのように捉えることに反対する人は多くいる。たとえば、Meyは、このように発話解釈を取り扱うことは、“disconnected from everyday communication and its problems （Mey 1993：82)”と述べている。人間は社会的存在であり、したがって社会的に決定された状況、環境といった、いわば前提的枠組みの中で伝達は行われるものである。Meyの言うように、いかに人々は伝達するのか（how people communicate）を扱うのではなく、つまり、いかに発音するか、ペットのことをどういう風に話すか、思考をどう表明するか、人の言ったことをどう思うかといったことではなく、われわれの興味は、社会的コンテクストの中で伝達するとき、それを可能にしているのは何かについてにある。文法能力、推論システム、視覚システムといったサブパーソナルシステムである。サブパーソナルシステムを駆使して、現実の言語使用をどう説明するかこそ科学の名に値する。パーソナルレベルの行為よりはるかに科学的探求に受け入れられやすいと考える。人間の心の外にある何かについての理論ではなく、認知的アプローチでなければ人間

の心の研究としての言語学にならないと考える。

こうして初めて文法論と語用論の相互作用を説明することが可能となり、人間の心、精神活動の解明という言語学の目標に向かうこともできるのである。Sperber and Wilson (1995：3) によれば、伝達には区別される二つの認知メカニズムがある。ひとつは記号化—解読化メカニズムであり、もうひとつは推論メカニズムである。生成文法は発話解釈に含まれる認知メカニズムの一方の説明を提供し、関連性理論はもう一方のメカニズムの説明に貢献する。重要な点は、発話がコンテクストに応じてさまざまに異なる解釈がなされるのも、根本的にはわれわれの持つ厳密な言語知識に依存していて、かつ、より一般的な原理を前提としているということである。言語知識を超えた解釈の基本となる中心的概念は、「関連性 (Relevance) 」である。関連性に照らすことにより、言語的意味を超えて、話し手が伝達しようとしている意味にたどり着く。そこにたどり着けるのは言語知識が備わっているからである。

## 3. 観察記録・分類・仮説

発話解釈のサブパーソナルレベルでの説明とは、生成文法でUGの解明を目指すのとパラレルに考えられる。つまり、人間言語の普遍性を目指すということを意味し、使用を律している原理を発見することである。一般論をやるのであるから、それはさまざまな言語を観察し、その結果得られたものを帰納的に主張するのではなく、心理的、生物的アプローチから必然的に帰結する主張である。UGという脳内にある自然現象を対象とするのであれば、言語事実の観察調査から始まることは確かである。同様に、言語使用の説明も、一つ一つユニークな発話を観察することから始まる。しかし、一つ一つの発話はユニークであるが、一つ一つユニークな出来事として記述するのではない。ある部分を切り捨てなければならない。つまり捨象、抽象化は何らかの一般論を試みるのであれば、必然的に伴ってくるものである。(文学の研究というのは、ユニークな出来事をユニークに

記述することかもしれない。)

言語使用の全体の体系がどうなっているのかということに煩わされずに、ばらばらの事象を調査することはできる。しかし、個々の現象をばらばらに研究する、分析するというのは意味がない。相互の関係、全体の体系とのつながりといったことが問題となる。発話の表れを記述するということは、観察結果の分類･記述ということである。事柄を常識といった暗黙の了解に任せないで、相手が納得できるよう基準を明白に述べ、その基準に従って首尾一貫した分類･記述をしなければならない。分類･記述に価値を与えるのは、言語行動の説明に役立ち、予測を可能にするということである。つまり、何ゆえの分類なのかということである。母国語話者の言語行動を説明できるような理論を求めての分類であり、最大限の予測を可能にするものであること、すなわち単純な記述ではなく、説明が必要であるということである。

単なる分類が説明を与えられることによってその価値を得るということを、一つの例を提示することによって示そう。橋本進吉博士（1882-1945）は、万葉仮名の用法に、エ；キ・ケ・コ；ソ；ト；ノ；ヒ・ヘ；ミ・メ；ヨ；ロおよびその濁音が、語によって2種類の使い分けがあり、それは当時の音韻の区別を反映したものであったことを指摘した。カ行を例にとると、イ列、エ列、オ列にそれぞれ甲類･乙類の2種の別（カ・キ甲・キ乙・ク・ケ甲・ケ乙・コ甲・コ乙の8個の仮名）があった。このことは、本居宣長が『古事記伝』（巻1）で論じたのが始まりで、それを弟子の石塚龍麿が使い分けを記述した。石塚はそのように分類できることを示したのみで、当時の音韻の区別を示したものであるという説明は橋本博士によって始めて与えられたのである（大野1974参照)。

観察調査の目的は、それから一般論、原則といったものを導き出すことであり、この一般論のカバーする現象の範囲が広ければ広いほど、興味のあることになってくる。その一般論が、学会の常識、あるいは辞書などに記載されて確立しているとされている考えを裏切るようなものであれば、面白さは倍加することになる。

## 4. 科学的説明とは

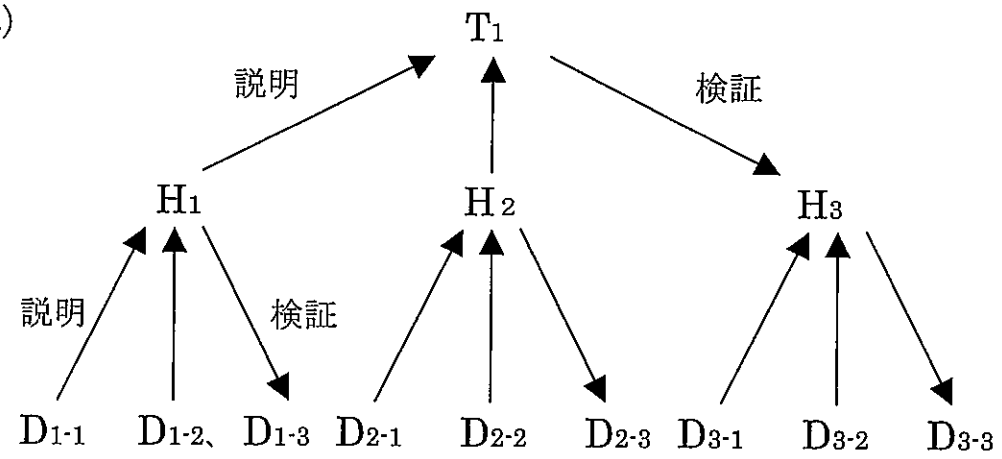
分類、記述に価値を与えるのは、それが母国語話者の言語行動の説明に役立ち、予測を可能にするからであると述べた。この目的にかなった科学的説明の方法はどういうものか。説明とは、発言命題の意味を、他の発言命題から導き出してくることであり、導き出すような理論体系を作りあげることである。経験科学の場合、まず「観察記録（D)」から出発するが、言語学の場合は内省による観察も認めてよいだろう。次に、現存する理論と論理とを考慮に入れ、それを導き出すような「仮説（H)」を立て、それによって「説明」される。特定の観察記録$D_1$から仮説$H_1$が導き出されるとすると、そこに働いているのは次のような演繹である。

(1) $H_1$ならば、$D_1$である。
　　$D_1$である。
　　したがって$H_1$である。

ここで真であると分っているのは$D_1$であり、$H_1$は未知である。$D_1$が成立するための必要にして十分な条件を示すもの、これが説明である。

次に、$H_1$を出発点として、始めの観察記録にはなかったが、観察可能なデータ$D_2$によって、$H_1$がワークするかどうかを考える、つまり「検証する(verify)」することになる。「説明」は「Dである」から条件部のほうへ進み、「検証」は条件部から帰結部のほうへ進む。反証が現れないとき、その仮説は確立されて法則（law）と呼ばれる。次にその法則を導き出す発言命題を考える。法則が説明できる命題を理論（theory）と呼ぶ。

(2)




法則は観察記録の一般化であり、理論は法則の説明である。

経験科学では、低位の命題は高位の命題の論理的帰結であるが、それを信じる証拠は、それが最下位の観察記録を導くことが出来るからである。PならばQであるという論理は、まず「Qである」が信じられ、それから「Pである」という推論がなされる。経験科学では経験、つまり言語事実という土台があり、上へ向かって伸びていくのである。これが科学的説明である。信頼できる予測を可能ならしめるように、経験（言語事実）を組織立てることである。

たとえば、英語の発話の*And* conjunctionを取り上げて（2）の意味するところをたどってみよう。まず（3）のような二つの発話がandでつながれた観察記録（$D_1$）がある。同時に、内省によって（4）のようなandのない並列発話の観察記録も証拠として登用される（例はCaston 2002 から）。

(3) a. It's summer in New Zealand and it's winter in Japan.
b. She handed him a cloth and he wiped the windscreen.
c. We spent the day in town and went to Harrods.
d. She gave him fish for super and he became very ill.
e. He left her and she took to the bottle.
f. She's tall and he's short.

(4) a. It's summer in New Zealand. It's winter in Japan.

b. She handed him a cloth. He wiped the windscreen.

c. We spent the day in town. We went to Harrods.

d. She gave him fish for supper. He became very ill.

e. He left her. She took to the bottle.

f. She's tall. He's short.

(3a) においてandの左右の連言肢を入れ替えても意味は変わらないが、(3b) ― (3e) では意味が変わる。即ち、(3b) は連言肢の二つの事象が連続して起こる通常の場合であり 'and then'と言い換えられ、さらに'with the cloth' という解釈も伴う。(3c) にあると理解される時間的関係は内包といったものであろう。つまり、町で過ごす時間の中にハロッズへ行くことが含まれている。(3d) (3e) に含まれると考えられる因果関係はお互い少し異なる。(3d) の第二連言肢の出来事は第一連言肢の出来事によって直接引き起こされたものであり、一方 (3e) は第二連言肢は第一連言肢で述べられことへの一つの受け方として解釈され、ここでの因果関係は間接的である。また (3f) に含まれている意味は二人は対照的であるということであろう。以上のような話は例が出てくれば来るほどに考えられるし、二連言肢の関係も微妙に変わってくる。

二つの連言肢間の関係は単なる「時」の連続よりずっと多様なものを包含していることを (3) は示している。このことは、両者の関係についての適切な説明は語用論的になされる、つまり、話し手が世界の出来事、事象がお互いどう繋がっているかについての一般的知識に訴えることによってなされる、ということを示している。Andの語用論的説明への支持は、(4) のようなandがなくなったとき、同じ時間関係と因果関係が生じるということによってなされる。つまり、これら接続詞のない対応例は、個々の文が記述する事実間の関係について伝えられる情報は同一のものであると理解されるのである。したがって、(4d) は (3d) と同様、彼が病気になったのは彼女が食べさせた魚のせいだと解釈される。同様の観察が明示的にandで繋がれた例に対応する (4) の例に関して認められ、このことは二つ

の事象間の関係がandそのものの意味に関わるものでないことを示している。Andの意味論的多義性の否定という仮説（$H_1$）が一つの法則として認められることになる。

以下の（5）—（7）の例を$D_2$、$D_3$、$D_4$として考えてみよう（Carston 2002参照）。

(5) a. Sally is ready. [FOR SUCH AND SUCH]
b. Sam is old enough. [TO DO SUCH AND SUCH]
c. Micky is short. [COMPARED WITH OTHERS IN SUCH AND SUCH CLASS]

(6) a. I've had breakfast. [TODAY]
b. I have been to Tibet. [IN MY LIFE]
c. It's raining. [IN SUCH AND SUCH A PLACE]
d. She opened the door. [WITH SUCH AND SUCH A KEY]

(7) a. A : Where's Sue?
B : At home.
b. Michael's father.
Communicates : The man near the door is the father of Michael Blair.
c. Confidentially, Sam is seriously ill.
Communicates : I am telling you confidentially that Sam is seriously ill.

(5) と（6）の例はいずれも括弧内に大文字で示された要素を補って解釈される。つまり、聞き手は文脈情報から「発音されていない」要素を復元するのである。たとえば、(5a) では友人のピーターを飛行場に迎えに行こうとしているときであれば、飛行場へ出かける用意が出来ていると解釈さ

れる。(6a) と (6b) においては、そのタイムスパンを短くしたり、伸ばしたりすることによって、話し手の意図した思考内容に近づくのである。言語情報にない要素が語用論的推論によって補われるプロセスのうち、(5) は文法論的に不可欠な項目を埋めるプロセスであり (「飽和 (saturation)」と呼ぶ)、当該のコンテクストで必要とされる概念項目を加える (6) (「自由拡張」(free enrichment) と呼ぶ) とは区別している。(7) の発音されていない要素の復元に関しては、(7a) Bの発話は省略と考えられるが、(7b) と (7c) は談話の冒頭に起こっているので、省略とは考えがたい。前者は文法のレベルで命題をなしているのであるが (したがって見えない要素の復元は文法が要求している)、後者は伝達される命題内容は純粋に語用論のレベルで聞き手によって補われる (したがって文法のレベルではその命題は決定されていない) のである。

これら (3) — (6) の一連の例は、発話そのものの持つ意味は話し手の伝達しようとしている意味とは大きな隔たりがある、言い換えれば、発話に用いられた言語情報は話し手の意味を伝える単なる手がかりに過ぎないということを示している。言語情報の不完全性を、関連性理論の枠組みでは「言語的意味確定度不十分性 (linguistic underdeterminacy) 」と呼ぶ。骨と皮だけの言語情報を基に、聞き手は推論を駆使して概念を足していき、真か偽かの判断が可能な命題内容まで肉付けをするというテーゼである。

観察記録$D_1$、$D_2$、$D_3$、$D_4$から「ならば」の方へ進み、仮説$H_1$、$H_2$、$H_3$、$H_4$を導き出し、次に「ならば」から新しいデータの方へ進んで、反証が現れなかったとなれば、それらの法則が説明する「言語的意味確定度不十分性」は理論となる。同様にして、日本語における、あるいは中国語における言語的意味確定度不十分性が確立されれば、これは一般言語理論となり、これは未知の (別の) 言語を取って検証に供されることになる。人間の言語に対する能力という概念の一部に結び付けられて説明されることになる。次のステップとして考えられることは、他の知的能力を説明する理論と同じものかどうかというより高次の説明である。言語学という一つの科学の中で最終的説明を求めることはできないということである。

## 5. 説明のための理論体系の危険性

以上、語用理論をやっていく上で、作り上げられた理論体系の中で、発話の実際をどう説明するかについて概略を述べてきた。言語理論は、直感・常識を明白に形式化する点にあるので、まず理論の理解が必須、そしてその理論の中で規定された概念を使って、言語使用の実際を形式化していくことが大切である。表面的な事柄に注意を奪われるのではなく、人間の言語能力の解明という、高次の根本的な問題に取り組むという姿勢が求められる。

最後に、説明理論を求めることこそが科学の名に値するのであるが、言語の説明理論が陥る危険性について述べてみたい。一つは経験的事実の観察・吟味がおろそかになることである。データは慎重に注意深く扱うことが大切であるが、日本人が英語を材料とする場合はことさらである。英語の事実をそのまま日本語のデータとして扱わないことも心に刻む必要がある。たとえば、'after all' の意味機能の考察の結果を、「結局」という日本語の分析にそのまま使うのは危険である。'After all' 節の命題内容を、聞き手が既に知っていると、話し手が思っていて、それを呼び出すよう聞き手に指令するという、概念を有しているとは考えられない、いわば「手続き的」意味を持つと 'after all' は 分析されるのであるが、「結局」は、「結局のところ」とか「挙句の果て」とか「とどのつまり」などと言い換えられることからも、話し手による指令を記号化しているというより、むしろ何か概念を記号化していると考えるのが妥当であろう。「ほら」とか「何ていったって」といった日本語が適切な場合が多いと思われる。一般性、普遍性というのは抽象的なレベルで捉えられるものであり、各言語は「組織的に異なる (systematically different)」という認識を持たねばならない。

危険性の第二は、このような仮説、演繹体系による方法の妙味は、ある観察記録から得られた仮説・理論から元の観察記録になかったようなデータ・仮説が導き出されるという点にある。新しい事実関係に気づかせてくれることなしに、誰でもわかりきった事柄だけを形式化するだけになると、

分析の魅力は失われる。既に分りきっていることだけで、スマートにエレガントに形式化することだけに腐心してはいけない。理論が、これまで気づかなかったような直感を知らしめ、仮説に導いてくれるとき、その威力を感じる。研究の醍醐味はまさにここにあるといえよう。理論の構築の中で使う概念—言語的意味確定度不完全性や飽和や意味拡充、あるいは手続き的意味といった—は、文とか語とか音節といった単位、名詞や動詞といった類と同様に、理論体系の中で関連して始めてその意味を得るのであって、あらかじめ規定されているものではない。ある理論体系の中で意味があっても、別の理論体系の中では意味を失うこともある。そういうことも肝に銘じる必要がある。

## 6. おわりに

説明が出来ても検証がないと、それは推測の域を出ないのであって、確立されるためには多くの言語事実に当り、その理論における検証を必要とする。言語使用を対象とする語用論の場合はとりわけである。つまり、上に向かって伸びるほどに、土台の方も広げていかなければならないということであろうか。

どんな方法も、目的があり、目的に意味を与えるのは問題である。目的と問題に価値があって初めて分析は始まる。言語知識も人間の言語使用も抽象化をすることによってその本質がつかめる。しかし、さらなる進展のためには抽象化以前の問題に立ち戻ることが必要である。つまり、具象に立ち戻る、もう一度疑ってかかるという姿勢である。これこそが学問の進歩であり、ひいては自分自身を乗り越える進歩であろうと信じる。

＊ 本論は、2006年11月18日に、横浜言語学会（Yokohama Linguistics Society）を立ち上げるに際して、話をしたものに加筆している。当日列席し、コメントを下さった伊藤克敏氏及び当日出席した院生と修了生諸氏に感謝する。

**主要参考文献**

Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge : Cambridge University Press.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances : Explicit / Implicit Communication*. Oxford : Blackwell.

福井直樹. 2001. 『自然科学としての言語学　生成文法とは何か』大修館書店.

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge , MA : Harvard University Press.

橋本進吉　1950.「国語音韻の変遷」『国語音韻の研究』（橋本進吉博士著作集 4 .）岩波書店.

Mey, J. 1993. *Pragmatics : An Introduction*. Oxford : Blackwell.

大野　晋. 1974. 『日本語をさかのぼる』（岩波新書）　岩波書店.

Sperber, D. and Wilson, D. 1986/1995. *Relevance : Communication and Cognition*. Oxford : Blackwell.